

## 美とフィボナッチ数列と黄金比

「玄人筋の投資は新聞紙上の美人コンテスト、参加者は 100 枚の写真の中から最も美しい顔かたちの 6 人を選び出すことを要求され、参加者全員の平均的な選好に最も近い選択をした人に賞品が与えられるという趣向のコンテストになぞらえてみることもできよう。このようなコンテストでは、それぞれの参加者は自分がいちばん美しいと思う顔を選ぶのではなく、他の参加者の心を最も捉えそうだと思う顔を選ばなければならない。全員が問題を同じ観点から見ているのである。ここでは、判断のかぎりを尽くして本当に最も美しい顔を選ぶということは問題ではないし、平均的な意見が最も美しいと本当に考えている顔を選ぶことさえ問題ではない。われわれは、自分たちの知力を挙げて平均的意見が平均的意見だと見なしているものを予測するという、三次の次元まで到達している。中には、四次、五次、そしてもっと高次の次元を実践している者もいる、と私は信じている。」  
(J. M. ケインズ (間宮陽介訳) 『雇用、利子および貨幣の一般理論』〈上〉岩波文庫、2008 年)

頭の準備体操：( ) に適切な数字を補いなさい。

0 → 1 → 1 → 2 → ( ) → 5 → 8 → ( ) → 21 → ( ) → 55 → 89 → ( ) → (以下省略) → ∞

この数列を逆に遡っていくと、つまり判断というヴェールをひとつひとつ剥いでいけば、やがて最初の美的判断、「美」、そして最終的に「美のアイデア」に辿り着くことになるかもしれない。もっとも、この「美のアイデア」という名の美的判断の起源は“0”なのである。問い：“0”とは 0 としてあるのか、それとも“0”なのだから何も無いのか？

このフィボナッチ数列の隣接する項同士の値は、やがてある一定の数に収斂していくことになる。その値を  $a$  とすると、

$$a = (\sqrt{5} - 1) / 2$$

になる。

$x$  をかりに「私」の判断、 $y$  を他者の判断とするなら、「私」の判断がある普遍性を有しているとみなされるとき (たとえば、ケインズが例として挙げている美人コンテストで「私」が見事賞金を獲得できたとき)、それは次の式が成立していることを意味しているとしたら……。

$$\frac{y}{x} = \frac{x}{x+y} = a$$